

## 学生の保育実習への不安に関する検討Ⅱ — 気になる子どもへの不安に対応できる授業の構築 —

矢野 洋子・安東 綾子

九州女子短期大学子ども健康学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2021年10月29日受付、2021年12月6日受理)

### 要 旨

保育士養成において実習は、座学と実学の往還性の原則の中で最も重要な理念とされている。そこで筆者らは学生の実習に対する不安が、実習の前と、実習を終えた後ではどのように変化するのかを明らかにし実習事前・事後指導のあり方について検討するために、令和2年度の2～3月期に保育実習Ⅰを終了した学生にアンケート調査を行ない報告を行った。(矢野・安東2021)

そこで実習を通して特に不安が多かった「気になる子ども」について、今年度前期の授業の中で、学生が実習中に感じた「気になる子ども」への支援方法についての疑問点について「障害児保育」の授業の中で取り扱った授業内容に取り組んだ。その後の「保育実習Ⅱ」においては、不完全ではあるが学生の「気になる子ども」への対応についての効果が感じられた。しかし実際の現場における支援は難しい場面が多く、授業で学んだことについて学生が体感的に理解することができること、実習において、適切な支援方法の指導や助言が得られることがより効果的であることなどが明らかになった。今後は、養成校において基礎的な知識を身につけるためにエピソードなどを通してより具体的な授業内容が求められる。また現場におけるより支援力を高めるために、具体的な支援方法について研修の実施などが望まれることを示した。

キーワード：気になる子ども・障害児保育の授業の在り方・現場の研修

### 1. はじめに

保育士養成においては、座学における指定単位の修得と実習が義務付けられている。実習は、座学と実学の往還性の原則の中で最も重要であるとされている。しかし保育士を目指す短大生にとって、特に初めての実習については、具体的なイメージを持ちにくい可能性のあることが、先行研究でも報告されているが、筆者らの短大においても学生への実習事前指導を行う中で、同様のことが推察された。そこで筆者らは学生の実習に対する不安が、実習の前と、実習を終えた後ではどのように変化するのかを明らかにし、実習事前・事後指導のありかたについて検討するために、令和2年度の2～3月期に保育実習Ⅰを終了した学生にアンケート調査を行った。

その結果、学生にとって、実習前は漠然とした不安や「日誌の書き方」、「手遊びや絵本読み」という保育技術についての不安がほとんどであり、実習中になると「子ども達や利用者との関わり方について」など、「障害児保育」や「保育内容 人間関係」など保育士科目に関連するより具体的な内容になることが明らかになった。つまり実習前には、「実習指導」やすべての保育関連科目の授業において、学生が実習をイメージできるような内容をできるだけ取り入れたり、見学実習やボランティア活動など実践からの学びを取り入れたりすることが有効であり、実習中に感じた子どもへの関り方や対応、支援方法についての疑問点については、実習後に実習事後指導だけではなく、該当する授業の中で具体的にどのような方法があるのかを講義や演習していくことが重要であると思われるということについて報告をした。(矢野・安東2021a) (安東・矢野2021b)

以上の結果を受けて筆者らは、実習中に感じた子どもへの関り方や対応、支援方法への疑問点については実習後に事後指導の中でのみ行うことは限界があることから、該当する授業（「障害児保育」「保育内容 人間関係」）の中で具体的にどのような方法があるのかを検討して講義や演習を行っていくことが重要であると考えた。そこで学生の実習中の疑問や不安について関連する科目の中でいかに取り入れていくか検討する必要性について検討したいと考えた。

特に「気になる子ども」は保育所・幼稚園・認定こども園等の保育現場において、出会う可能性は非常に高くなっている。現在に至るまで「障害児保育」は様々な形式や方法で行われてきていた。そこでは保育者と子どもの関係性に注目した「関係性の構築」を主眼においた保育・教育が中心であった。しかし、2005年に「発達障害者支援法」が施行される中で、多様な障害の種別が提示されるとともに、早期発見の重要性が強調された。さらに、2008年には「幼稚園教育要領」、「保育所保育指針」が改訂され、障害のある子どもへの個別対応が求められるようになった。つまり知的障害や自閉スペクトラム症などの明らかに発達に課題を抱える子どもたちを、いかにして早期発見して「療育につなぐか」という「ゴール」が求められている。また保育現場においては、個別の状態に応じてどのような保育を行うかということが求められている。そのための研修会も数多く開かれ、保育士や教員の障害に関する理論や専門用語の知識は積み重なってきている。その一方で、明らかに障害のある子どもたちに加えて、保育の長時間化、ひとり親家庭の増加、家庭機能の低下などからか、10年ほど前からはっきりとした障害の有無が判別できないにもかかわらず、「教室にじっとしていない」「すぐに切れてパニックになる」「友だちとの関わりが難しい」など、「愛着関係」に関連すると考えられる可能性もある、障害の有無の判別が困難な子どもが増加してきている。また保育所や認定こども園においては子育て支援の観点から多様な子どもたちの積極的な受け入れが推奨され、幼稚園でも預かり保育、未満児保育が拡充する中で、保育者の困り感や悩みは増加する一方である。

こうした現状から、保育者の「気になる子ども」の理解と対応は保育現場における喫緊の課題であり、効果的な保育者支援方策と支援体制の確立が求められている。保育士養成においても、そのような現場の現状とニーズに対応できるための基礎力を学生が身につけることは、養成校としての責務であり、そのためにどのように授業内容を構築するかを検討することは、必要不可欠な課題である。本研究は、実習事後指導だけではカバーできない「気になる子ども」に関する内容を保育士養成科目の中で取り入れ、その後の実習における効果や実態について学生にアンケート調査を行ない、「気になる子ども」についての養成校での授業の在り方について検討することを目的とする。

## Ⅱ. 方法

令和2年度の保育実習は、コロナ禍のため施設実習は、施設側の要請によりほぼ延期となっている。令和3年度8月9日には施設実習Ⅰ、保育実習Ⅰ・Ⅱ・保育実習Ⅱが実施された。

保育実習Ⅱを終了した2年生にアンケート調査を行った。

### 1. 対象

保育士資格を希望する短大2年生 85名

### 2. 期間

令和3年 9月～10月

### 3. 実施した授業

障害児保育・保育内容「人間関係」

### 4. 倫理的配慮

倫理的配慮として、学生や実習園が明らかにならないように匿名でのアンケート調査を行った。また結果に引用している学生からのエピソードに関しては、学生や実習園が特定できないように事実を変えない程度の若干の修正を行っている。

### 5. アンケートの内容

アンケートの内容を表1に示す。

表1 アンケートの内容

I 実習の不安に関する調査 (1年次・2年次の保育実習で実施)	II 気になる子どもに関する調査 (2年次の保育実習でのみ実施)
①実習に行く前の不安は何ですか	①「気になる子ども」はいましたか
ア:実習全般	ア:いた
イ:気になる子どもの対応	イ:いなかった
ウ:子ども同士の人間関係やトラブルへの対応	ウ:気づかなかった
エ:実習先の保育者との人間関係	②「いた」と答えた人は何人いましたか
オ:主な活動の部分実習の内容や実施	人
カ:手遊び・絵本読み	③気になる子どもの行動でどのような行動に困りましたか
キ:日誌の書き方・メモの取り方	ア:集団に入れない・落ち着きがない
ク:指導案の書き方	イ:意思疎通ができない・話させない・難聴
ケ:安全管理について	ウ:乱暴(人やモノ)・噛みつく・蹴る等
コ:発達に即した援助の仕方について	エ:パニック・癇癪(かんしゃく)・泣く
サ:その他	オ:発達がゆっくり
② ①で挙げた不安のなかで行く前までに解決したものは何ですか。	カ:大声・奇声
ア:実習全般	キ:体を触る・スキンシップが多い
イ:気になる子どもの対応	ク:トラブル・喧嘩
ウ:子ども同士の人間関係やトラブルへの対応	ケ:暴言
エ:実習先の保育者との人間関係	コ:指示が通らない・言うことを聞かない
オ:主な活動の部分実習の内容や実施	サ:次の行動への切り替え
カ:手遊び・絵本読み	シ:自傷をしてしまう
キ:日誌の書き方・メモの取り方	ス:ぼーっとしている
ク:指導案の書き方	セ:こだわりが強い
ケ:安全管理について	ソ:態度や機嫌が急に変わる
コ:発達に即した援助の仕方について	④「気になる子ども」の対応ができましたか
サ:その他	ア:対応できた
③ ②で挙げた解決できたものは、どうやって解決しましたか。	イ:対応できなかった
ア:授業で取り扱われた	⑤ ④で対応できなかったを選んだ人はその理由を下記から選んでください
イ:実習の事前指導	ア:支援の方法がわからない
ウ:先輩や友達からの情報	イ:支援が合っているかわからない
エ:事前訪問での説明	ウ:「気になる子ども」について実習先の実習担当者から何も聞いていなかった
オ:大学の実習担当教員への相談	エ:その他
④ 実習をとおして困ったことを選択または記入してください。	⑥障害児保育の授業内容で役に立った・今後役に立ちそうな内容について具体的に記入してください。
ア:気になる子どもへの対応	⑦障害児保育の授業内容でまだ知りたいことについて具体的に記入してください。
イ:子ども同士の人間関係やトラブルへの対応	⑧「気になる子ども」の対応をしたときの状況についてあてはまるものを下記から選んでください。また、選択肢にない場合はその他に記入してください。
ウ:実習先の保育者との人間関係	ア:自分では対応できないので、保育者を呼んで対応してもらった。
エ:主な活動の部分実習の内容や実施	イ:授業で習ったことを思い出してやってみた。でもうまく対応できなかった。
オ:手遊び・絵本読み	ウ:授業で習ったことを思い出してやってみた。うまく対応できた。
カ:日誌の書き方・メモの取り方	エ:保育者から対応についてきていたのでその通りやった。
キ:指導案の書き方	その結果うまくできた
ク:安全管理について	オ:保育者から対応についてきていたのでその通りやった。
ケ:発達に即した援助の仕方について	その結果うまくできなかった
コ:その他	カ:保育者の対応方法をみてその通りやった。
⑤ ④で挙げた内容で実習中に解決できたものは何ですか	その結果うまく対応できた。
ア:気になる子ども・利用者への対応	コ:保育者の対応方法をみてその通りやった。
イ:子ども同士や利用者同士の人間関係やトラブルへの対応	その結果うまく対応できなかった。
ウ:実習先の保育者との人間関係	カ:その他
エ:主な活動の部分実習の内容や実施	⑨上記で選択した「気になる子ども」の対応状況について、その時の状況がわかるように詳しく記入してください。
オ:手遊び・絵本読み	
カ:日誌の書き方・メモの取り方	
キ:指導案の書き方	
ク:安全管理について	
ケ:発達に即した援助の仕方について	
コ:その他	

### Ⅲ. 結果と考察

#### 1. エピソードを使用した具体的な支援方法についての「障害児保育」の授業の実施について

まず「気になる子どもへの支援方法に困った」という前回のアンケート結果を受けて、「保育実習Ⅰ」終了後の前期に以下のような授業での取り組みを行った。

当該学生たちは、1年時後期に「特別支援教育論」において、主要な障害についての基礎知識は講義を受けている。しかし実習において実際に活用できることはかなり困難であり、また様々な子どもたちがいることから「気になる子ども」への全般的な知識不足は推測された。また特に「保育室を飛び出す」「指示が通らない」「友達とトラブルになる」などの行動に対する対応が実習生の立場では難しく、「保育実習Ⅱ」までに具体的な支援方法を、授業の中で取り入れることが必要であると感じた。しかし「実習事後指導」の授業においては、時間的また内容的にも難しい面が予測されたため、前期の授業である「障害児保育」において（保育士必修科目）従来も行っていたが、より多彩なエピソードなどを取り入れて、1つ1つの事例への支援方法についての疑問が解決するように授業を行った。

具体的には以下のような流れで行った。

①教科書や実習のエピソードについてどんな方法が考えられるか検討する→②何人かに発表してもらう→③その内容について解説する→④各自の支援策についてや解説については丁寧に修正を入れて、授業終了後に提出→⑤次回の授業で返却、書かれていた疑問点についてはその時に解答・解説を行う、という方法を繰り返した。

本来ならグループワークがふさわしい内容であるが、前期はまだコロナ禍にあり感染者数も多かったため、グループワークは行わず発表も最小限の内容にとどめた。また緊急事態宣言下では、課題対応の時期もあったため実際に対面授業は数回の実施であった。また提出されたレポートについては、学生の理解度や疑問点、興味の程度などについて検討を行ない、いくつかの事例に限って実習園や学生が限定されないように使用した。発表はできなくても、レポートには素直な疑問や困り感が記載されているものも多く、学生の素直な真の疑問や不安を確認することができて有効であった。

またエピソードの記述に関しては、記述内容は学生によって差異がかなり見られた、それは文章力・観察力・観察するポイントを把握できているかという学生の基礎的な力・実習園での指導内容などが影響しているように感じられたため、それぞれの事例において、観察のポイントや把握すべき情報についての説明も併せて行った、また学生が「この子はどのようにしてこんな行動をとるのだろうか」という素朴な疑問を持つこと、それについて「知りたい。」と思う関心が必要であることを感じ、保育士養成において、そのような「学びの気持ち」を育てることは他の授業においても、学生に伝えるべき基礎内容となるのではないかと感じ、一つ一つの授業の重要性について改めて感じた。

#### 2. 授業に対する学生のアンケート結果

この授業内容に対する学生へのアンケート結果は以下の通りである。自由記述であるため記述内容を分類すると、以下の3点に分類できた。それぞれの内容についてあげる。

##### (1) 子どもへの具体的な支援方法

- ① 支援方法・かわり方
- ② 障がいがある子への配慮
- ③ その子の気持ちを汲み取ることの大切さ
- ④ こだわりがある子への対応
- ⑤ エピソードから子どもの行動や支援方法について考察することができた
- ⑥ 授業で視聴したビデオであったような似た子どももいたのでどのように接したらいいのか少し理解できた



- ⑦ 保育環境や保育者の対応が変わればまた違った一面が見れること
- ⑧ 全ての行動に怒らずに（注意をする）まずは、何故したのか理由を考えたり子どもに聞いたりして、子どもの気持ちに寄り添うようにする。

## (2) 障がいの種類や特徴

- ① 障害の特徴を理解することができた
- ② 障害の特性をきちんと理解した上で子どもと接することができたこと。
- ③ ビデオを見ることで障害のある子どもについて細かく見ることができたので色々な障害が理解できた。また気になる子への対応の仕方がイメージしやすく、実際に気になる子がいた場合は保育士のアドバイスを聞きながら対応がしやすくなると感じた。
- ④ 特徴がわかる事で、その子が障害児の可能性があると自分の中で考えることができ、その後の対応を変えることができた。
- ⑤ 障害の特性を知るだけでなく、保育者がどのように向き合い対応していくかを自身の考えと比べながら学ぶことができた。
- ⑥ 様々な障害児の特性などを事前に学んでおくことで、どのような気持ちなのか、何がしたいのか少しは理解出来た。
- ⑦ 自閉症などの子どもがどのような行動をするのかを知っていたので、驚くことなく対応できた。

## (3) 保護者への対応

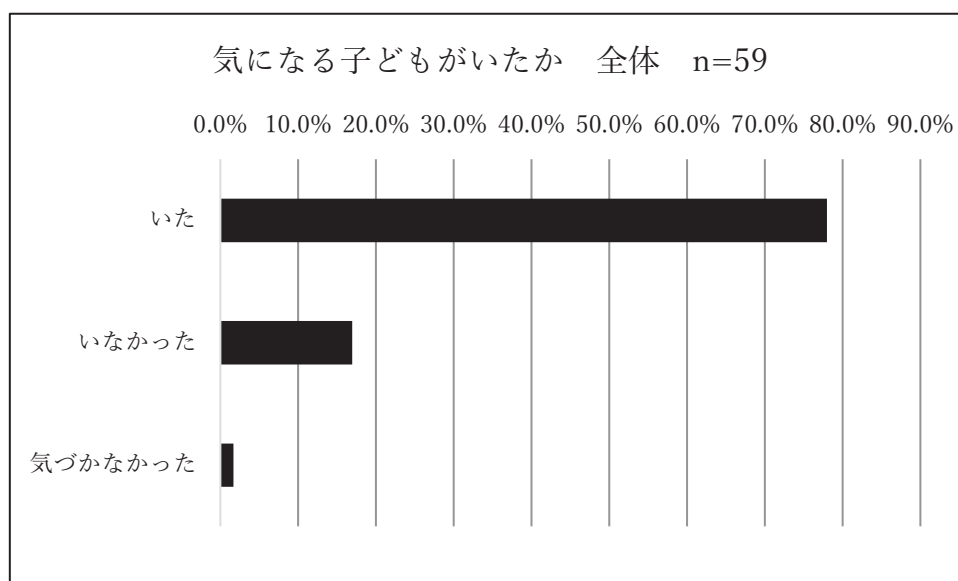
- ① 気になる子どもの保護者との関わり方
- ② 何事にも子どもや家庭の背景が関係していること、保護者と連携して対応していくことが大切だとわかった。

以上の結果から、前述したように障がいの特性など基礎知識については1年時の「特別支援教育論」で授業内容に取り入れているが、「保育実習Ⅰ」において、実際に体感することができたことが、より理解を深めることができる要因になっていると考えられる。実習までに現実的に深く障害児・者とかかわった経験があることは家族や親戚に障害のある人がいる・定期的にボランティアに行っているなどいくつかの特別な学生を除いては少なく、障害のイメージや特徴、行動の理解などを講義のみで高めることは困難である。そのために、ドキュメントなどの視聴覚教材をできるだけ使用するようにしているが、それは有効であったと言える。また、学生のアンケートの結果一番記述が多かったのは、「具体的な支援方法について」である。気になる子どもは、年齢も状況もそれぞれ同じではないため、困った行動に関しては個別のケースに応じた対応が求められる。教科書などの事例や学生から提出されたエピソードを通して具体的な支援方法について解説したことは有効であったと思われる。今後は、さらに具体的なエピソードを検討することを積み重ねて支援方法の基礎についての学びを構築していく必要がある。

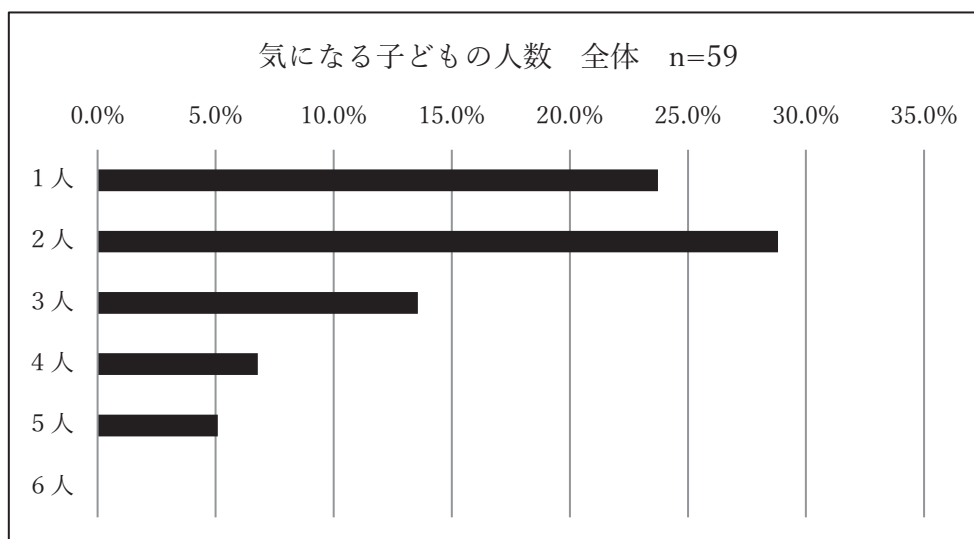
## 3. 保育実習Ⅱにおける「気になる子ども」に関する結果

アンケート調査内容では、「Ⅱ 気になる子どもに関する調査」の該当する部分について検討を行う。

結果は図1に示す。保育実習Ⅱにおいて、「気になる子ども」が「いた」(78.0%)という結果が「いなかった」(16.9%)に比較して圧倒的に多い。また人数は「1人」(23.7%)「2人」(28.8%)「3人」(13.6%)と1人から3人の「気になる子ども」の存在は70%近くにも上る。また「4人」「5人」という回答もあるが、あくまでも今回は実習生が「気になる子ども」と感じたり園側から説明があった子どもに限られるため、実際の数値としては慎重に取り扱わなければならない。

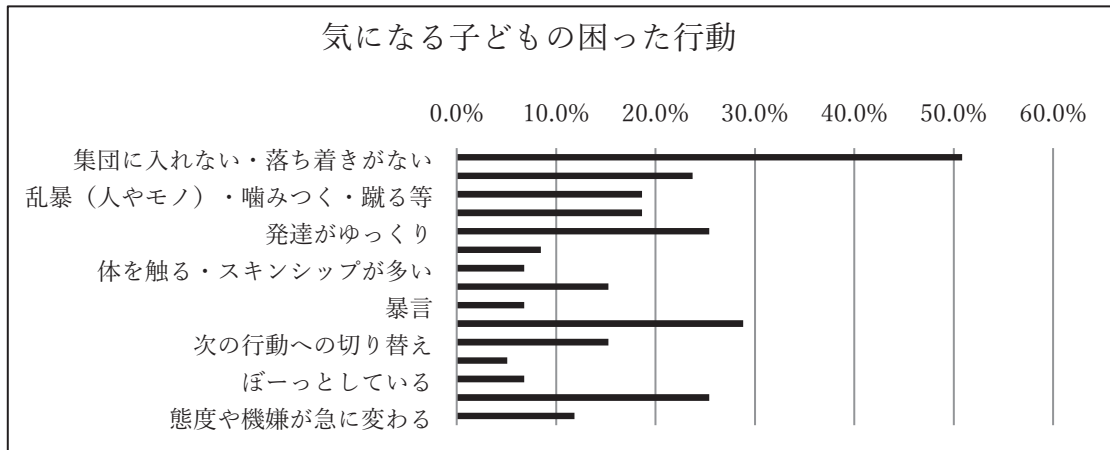


&lt;図1&gt;

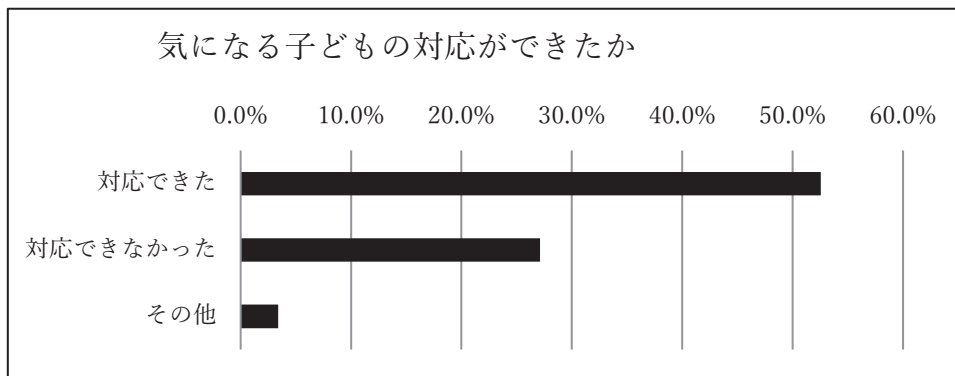


&lt;図2&gt;

また「気になる子どもの困った行動」については図3に示す。行動の内容は、「集団に入れない・落ち着きがない」が50.8%と半数を占めている。また「意思疎通できない」などコミュニケーションの問題、「発達がゆっくりしている」「指示が通らない」「こだわりが強い」なども挙げられている。そのような子どもたちの行動に対して、「対応できた」は52.5%「できなかった」27.1%となっているが、できなかった理由として「支援があつているかわからない」22.0%「支援の方法がわからない」8.5%と支援の具体的な方法についてが30%となっている。また「実習先の担当者から何も聞いていない」が3.4%あった。

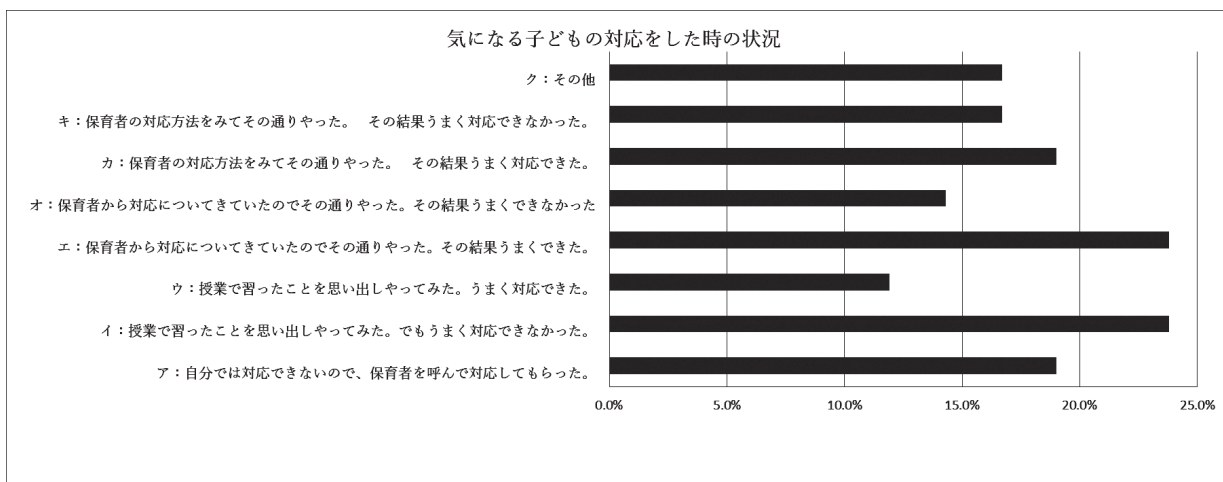


&lt;図3&gt;



&lt;図4&gt;

気になる子どもへの対応について詳細についてのアンケート結果が、図5である。

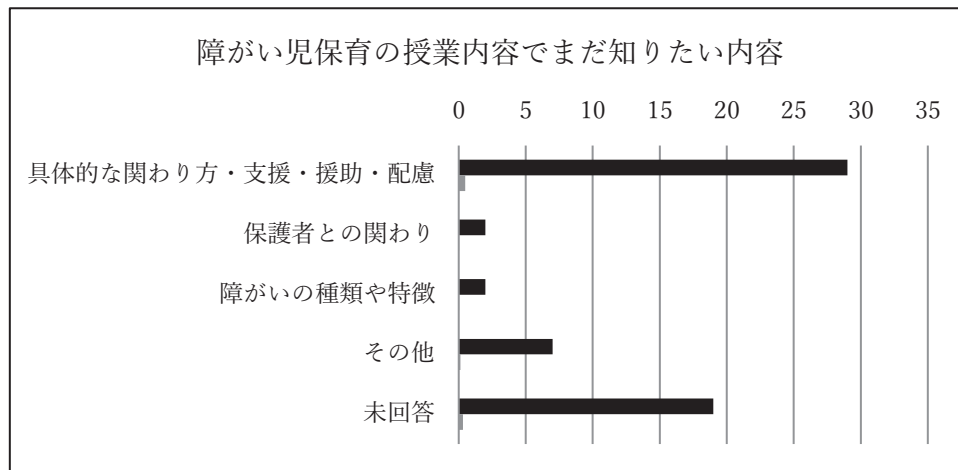


&lt;図5&gt;

対応できたのは、「保育者から対応方法を見て」（19.0%）「保育者から対応方法について聞いて」（23.8%）「授業で習ったことを思い出して」（11.9%）となっているが、それでもうまくいかなかった（23.8%）で

あり、子どもたちの状況に応じて支援を行うためには、授業での内容を応用することはまだ難しく、現場での直接的な保育者からのアドバイス通りに行ったり（14.3%）、保育者の支援方法を同じようにやってみても（16.7%）、うまく対応できなかったと実践するためには、保育者からのアドバイスや真似をしてみるというレベルではなく、根本的なその子どもの理解や信頼関係が構築されていることが重要であることも示唆されている。しかし、学生にとっては保育者からのアドバイスや実際の対応を身近で見るとは効果的な方法であるとも言えるであろう。具体的ななかかわり方は、子どもの家庭環境や成育歴によっても違いがあり個別の支援計画が必要とされる。また同じような対応でも、対応する人との関係性によってうまくいったりいかなかったりすることもあり（小竹・矢野ら2020）綿密な計画や必要に応じた微調整が必要であり、観察力やアイデアなど柔軟で高い能力が必要とされる。養成校においてその基礎力を身につけることは、必要不可欠であろう。

図6にあるように、学生が「障害児保育」の授業内容でまだ知りたいことで、トップにあげていることも確かな裏付けである。



<図6>

#### 4. 学生のエピソード

アンケートから実習での実践について学生の気づいたエピソードをいくつか提示して検討してみたい。

##### <エピソード①>

保育室からじっと窓の外を見つめる1歳児A君がいました。A君は集団に入らず、興味のあるものの方へ行ってしまうことが多く、保育者は怒ったようにA君の名前を呼んだり腕を引っ張って集団の中に呼び戻したりしていました。私は3日間、同じクラスに入りましたが、A君が窓の外を見ているときは「あっ！蝶々がとんでるよ」や「あったかそうな場所があるね」など指を指しながら声掛けをしました。するとだんだん、私のことを覚えてくれたのか、お集まりやお着替えの際にどこかへいくのではなく私のところへ来て膝に座ったりするようになってきました。

##### <エピソード②>

クラスには、自分の席に座っていられなかったり、昼食の時に教室の外に出て行くというような、落ち着きがない子どもが2人いました。ある日遊戯室で列に並んでいる時も2人が一緒にいたので、そばに行って「かっこよく座れるかな？」と声掛けをしました。一時的に、シャキッと体操座りをしてくれたのですが、すぐにお話ししたり、遊んだりしていました。そのほかに声をかける言葉が思いつかず、ただそばにいただけになってしまいました。



## &lt;エピソード③&gt;

B君は3歳児ですが、いつもあまり機嫌が良くなく、椅子には座ったものの、朝の会に参加しないことが多くありました。朝の会の時に参加しようとしないうえ、何とか参加してもらいたいと思い、私はB君の横に膝をつけて座り、声掛けをしながら椅子の向きを換え参加してもらおうとしましたが、B君はさらに不機嫌になり反抗的になったため、そのまま見守るだけにしました。

## &lt;エピソード④&gt;

1歳児のC君は、私たちが気にならないような音にとっても敏感で、気になり始めると落ち着かず、保育室を走り回ったり大声を出してしまいます。甘えも強く、また睡眠も決まった時間に寝ないとリズムが崩れ、午睡の途中で起きて落ち着きがないことから他の子どもを起こしてしまいます。保育者は全体を見ながらなるべくその子に付き添い、落ち着くことができるようにしていました。そのクラスには保育者が3人いたため、役割分担がしっかり出来ていました。その子の行動がひどくなった時には何が原因であるか辺りを見渡したりして探していました、要因を取り除いてあげることが大切だと分かりました。

## &lt;エピソード⑤&gt;

降園前の自由遊びの時間に、みんなでブロックで遊んでいましたが、Dくんは部屋を走り回っており、その様子を見た他の子ども走り出しそうになっていたため、「転んだら危ないから、座って遊ぼうね」と声をかけましたが効果はなく、Dくんはそのまま走り続けていました。

実習生では先生と同じように声掛けをしても、聞き入れてはもらえないと思って、保育者がDくんにどう対応するのかを見ていました。するとDくんは窓際に行き、物を踏んで怪我をする恐れがあったため、保育者が「危ないから戻っておいで」と声をかけていましたが、Dくんは聞き入れなかったため、保育者はDくんが近くへ来たのを見計らって、抱き上げて移動していました。

以上のエピソードから、授業で学んだ内容を実践しようとしても、それぞれの子どもの状態に合った支援は10日間の実習期間であることや、実習園によっては2～3クラスを順番に移動する場合もあるため、子どもに関する情報や観察が難しくなかなか実践方法がとっさに思いつかない場合がほとんどであると思われる。エピソード②に記述されているように（下線部）、「次の言葉が思い浮かばず・・・」はまさにその通りであると考えられる。

また、そのような中で指示をなかなか受け入れてもらえず、保育者との子どもたちとの関係の差を感じたエピソードもあるように、「信頼関係」を構築する難しさについても体感した学生も多いのではないかと推察される。

またエピソードによっては、(何らかの意図があるのかもしれないが) 事前に保育者から子どもについての情報や支援方法について知らされていない場合もあるようである。実習生の「気づき」を待つという意味はあるかもしれないが、子どもにとって実習生は人的環境の1つであり、その言動は非常に重要な位置を占めている。そのように考えれば、事前の説明などの情報伝達は必要なのではないかと考えられる。

「子どもに寄り添う」「信頼関係の構築」という基本的であるが、最も重要なことを体感できたであろうエピソードも多い。つまり気になる子どもに限らず、通常の保育においてよく言われる「寄り添う」「信頼関係の構築」「職員間の連携」などは、用語として理解ができていても、どのようにしていくのかという具体的な方法については、答えられない(考えつかない)学生は多い。授業においては、用語だけを解説するのではなく「具体的にどうするのか？」という方法を考え検討する内容を取り入れていくことが段階的に必要であるということを感じている。そのためにこのような学生の体験を取り上げることによって、「寄り添うってこんなことなんだ」「信頼関係ってこうやって作るんだ」「これが連携なんだという実感が真の理解につながっていくのではないだろうか。

#### IV. まとめと今後の課題について

以上の結果から、以下の2点にまとめられる。

(1) 保育現場においては、「気になる子ども」が人数の差はあっても出会う可能性は高い。

「気になる子ども」は「保育室から出ていく」「指示が通らない」「友達とのトラブルが多い」など集団での生活になじまなかったり、「急に切れる」「気に入らないことがあると暴れる」など支援の方法が難しい子どもが多い。その原因も、生まれながらの発達の問題だけではなく保護者との愛着関係の問題など環境要因が原因となっている子どもが多くなっている。特に保育時間が長かったり、家庭環境に問題があることが関連して、発達や社会性（人間関係能力）などに問題を抱える子どもが増えている。子どもの背景にある問題に応じて、関わっていくことが求められ、さらにそのような保護者とのかかわりも含めて支援できる専門性の高さが要求される。

(2) エピソードなどの事例を通じた具体的な支援方法を考えていく授業の在り方は効果がある。

「気になる子ども」について学ぶためには、障害の種類や特徴という基礎知識から障害についての正しい理解と関心を持つことがスタートとなる。しかし、なかなか障害のある子どもや大人の方に出会う機会は少ないのが現状である。そのためコロナ禍が解消した場合は、ボランティア活動や実習の機会を作ることや、できるだけ障害の理解に役立つような視聴覚教材を使用し、より具体的なイメージが持てるようにすること、またzoom授業などで現場の様子を紹介してもらうなどの工夫も必要であり、効果も高いのではないかと期待が持てる。しかし理論的な内容を実際の子どもたちの支援に応用していくことためには、実習生という立場から信頼関係の構築や情報の収集や分析が困難な場合が多く、就職後にその経験を生かしていくためのアドバイスや、エピソードの検証を行う研修や勉強会などが必要であろう。

また実習を経験した後は、疑問やうまく支援できなかったことをエピソードとして記述することで、自分の子どもの観察力や子どもを観察し、分析するポイントについて新たな学びにつながり、良い高い実践力の基礎を兼ね備えた人材の養成になるのではないだろうか。

また、今回は詳細な検討は行っていないが、現場における「気になる子ども」に対する支援方法や、支援体制の充実がまだ今後考えていく必要であるのではないかと感じられる。研修などを通して、「気になる子ども」に対する理論的な理解は深まってきているが、目の前にいる子どもたちの言動に対して具体的にどのように対応していくか、実習生への指導に生かされていくことがもっと多くなることがさらに望まれると感じている。「気になる子ども」が様々な背景で増加していることは確実であることから、養成校での基礎力養成と現場における実践力を個別子どもの状態に応じて高めていくための研修や、専門的なアドバイスなどとの定期的な連携から保育士の安心感や自信を深めていくことが「保育の質」の向上につながるのではないかと強く考える。

#### V. 引用・参考文献

- 1) 一般社団法人全国保育士養成協議会、「保育実習指導のミニマムスタンダード「協働」する保育士養成 Ver.2」、(2018) 中央法、pp.13-38 58-68 93-94
- 2) 岩崎桂子、「保育実習に関する不安調査からの一考察」、研究紀要、2 (2009) (小池学園) 1-10
- 3) 吉田康成、「実習不安の内容と変化 (Ⅱ)」、夙川学院短期大学教育実践研究紀要、1 (2009) 31-38
- 4) 村田務、岡本美智子、小林義郎、海野阿育、「保育実習への不安状況に関する調査」、白梅短期大学教育・福祉センター研究センター研究年報、9 (2004) 13-31
- 5) 三好環、「保育実習後の学生の能力感と意欲」、畿央大学短期大学部研究紀要、26 (2005) 31-42
- 6) 矢野洋子、橋口文香、安東綾子、井手裕子、「実践力養成のための実習プログラムの構築—1日見学実習の取り組みを通して—」、九州女子大学学術情報センター研究紀要、1 (2018) 93-105
- 7) 矢野洋子、橋口文香、安東綾子、高木富士夫、高口知浩、「実践力育成のための実習プログラムの構築—1日見学実習から次の実習に向けて—」、九州女子大学学術情報センター研究紀要、2 (2019) 131-140
- 8) 矢野洋子・安東綾子、「学生の保育実習への不安に関する検討Ⅰ—保育実習を通してどのように変化す

- るのか」九州女子大学紀要、第58巻1号、令和3年
- 9) 松永あけみ、「「気になる」子どもへの保育者の対応と周囲の子どもたちへの影響に関する保育者の意識調査」、群馬大学教育学部紀要、人文・社会科学編、代62巻、139-145、頁2013
  - 10) 竹内貞一・坪井寿子・府川昭世・田中マユミ・佐々木圭子、「保育における「気になるこども」の現状と支援の課題」、東京未来大学研究紀要、2010年第3号、pp77-83
  - 11) 佐藤智恵・七木田敦、「保育所・幼稚園における障害児・気になる子の保育支援に関する研究の変遷—特別支援教育への転換がもたらした影響を中心に—」、広島大学大学院教育学研究科紀要、第三部、第62号、2013、171-178
  - 12) 久保山茂樹・齋藤由美子・西牧謙吾・當島茂登・藤井茂樹・滝川国芳、「「気になる子ども」「気になる保護者」についての保育者の意識と対応に関する調査—幼稚園・保育所への機関支援で踏まえるべき視点の提言—」、国立特別支援教育総合研究所、研究紀要、36：55-76、2009
  - 13) 小竹利夫・芳野正昭・矢野洋子・猪野義弘、「障害のある子どもの保育・教育」一心に寄り添う援助をめざして—、建帛社、2020

## **A Study of Students' Anxiety about “Child Care Practical Training” II – Assembling a Class to Respond to Anxieties about Concerned Children –**

Yoko YANO, Ayako ANDO

Department of Childhood Care and Education, Kyushu Women's Junior College

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi 807-8586, Japan

### Abstract

In the training of childcare professionals, practical training is considered the most significant philosophy in the principle of the reciprocity between classroom learning and practical learning. To clarify the changes in students' anxiety about practical training before and after the training, we conducted a questionnaire survey and reported the results to the students who had completed “Childcare Practical Training I” from February to March of 2020. (Yano, Ando 2021).

In the first semester of this school year, we have addressed the questions that students had about how to support “Concerned children”. which was particularly common during the practical training, in the content of the class on “Childcare for children with disabilities”. In the subsequent “Childcare Practical Training II”. although incomplete, the students' ability to treat "Concerned children" were felt. However, there are many difficult situations in the actual fields, and it became clear that it would be more beneficial for the students to have an experiential understanding of what they learned in the classroom, and to gain guidance and advice on appropriate support methods during the practical training. In future, training schools will be required to provide more specific lessons through episodes based on experiences to help students acquire basic knowledge. It is also desirable to carry out seminars on specific support methods in order to improve support capabilities in the field.

Keywords : Concerned children, Teaching of childcare for disabled children, Trainings at the fields